

代走出場「家族に恩返し」

一塁コーチャー大野(階上)

八学光星で、一塁コーチャーとして出場した大野僚磨(階上町出身)。アルプス席では、それぞれ別々の高校でかつて聖地を目指しながら果たせなかった2人の兄が、「背番号14」に熱視線を送った。九回には大野が代走として登場。兄たちは「甲子園に弟が出場しているなんて夢のようだ」「弟の姿をしっかりと目に焼き付けた」と感慨深げに話した。

(上村公悟)



ナインに指示を出す一塁コーチャーの大野僚磨=18日、甲子園

大野は「レベルの高い環境で甲子園を目指したい」との一心で八学光星を選んだ。進学希望を家族に伝えたのは中学3年の春。父喜代治さん(53)は「最初はびっくりしたが、本人の意思を尊重した」。

一方、八戸高だった兄雄磨さん(25)、八戸工大高だった拓磨さん(26)は、光星の強さを知っているだけに「確実にメンバー入りできる高校に進学した方がいいのでは」と説得を試みたこともあった。それでも大野は自分の希望を曲げなかった。「最後までメンバー入りできないかもしれない。それも覚悟でめげず最後まで努力する」と両親と約束し、光星に進んだ。

当初は周りのレベルの高さに「ついていけないのか不安だった」が、家族や仲間が弱音を吐くことはなかった。「誰よりも真面目に練習や寮生活に取り組んだ」と大野。地道な努力が認められ、初めてユ

元球児2人の兄「誇り」

大野の今後の夢は、野球の指導者。「光星での経験を生かして、甲子園のすごさ、野球の楽しさを伝えていきたい」。しっかりと将来を見据えていた。

二ホームをもらったのは昨年秋。副主将にも任命され、試合にはあまり出られなかったが、献身的にチームをサポートし続けてきた。

準々決勝では家族が見守る中、代走として同点のホームを踏むことなく高校最後の夏が終わった。「試合に負けたのは悔しいが、最後に代走として走る姿を見せられたのは家族への恩返しになった」と思う。「今まで本当によく頑張った」としみじみ。拓磨さんも「誇りに思う」とねぎらった。



3塁側アルプススタンドから八学光星ナインを見守る、大野僚磨の兄雄磨さん(左)と拓磨さん(右)